

# 明神山系遺跡分布調査概報 I

付. 松岳山古墳墳丘測量

1984年度

1985年3月

柏原市教育委員会

## はしがき

高度経済成長が終わり、人口も増加傾向が鈍りつつあるとはいえ、今なお開発は目を見張るペースで続いている。柏原市においても例外ではなく、山間部の開発が進みつつあり、開発と文化財保護、開発と自然環境の保護という大きな問題に直面しています。

文化財行政も、開発等の土木工事に伴う緊急発掘調査に追われている毎日ですが、それだけでは文化財行政は充実できないと考えています。開発に際しても、事前に十分な協議を経、重要な遺跡は保存し、市民の社会教育に活用していくかねばなりません。そのためには、市内の遺跡の状況を適切に把握しておく必要があります。

明神山系の遺跡分布調査は、このような意図のもとに計画されたものです。将来予想される開発に備えて、遺跡の有無、範囲を確認することを目的としたものです。

分布調査の結果、遺物散布地や多数の古墳の発見等、予想以上の成果をあげることができました。しかし、これらは地表で確認できたものだけであり、地下に埋蔵されている文化財は、更に多数にのぼると想像されます。

これらの遺跡を残した明神山系の山並みが、子々孫々まで今の美しい姿を留めていけることを願いたいと思います。

昭和60年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和59年度国庫補助事業（総額3,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市田辺2丁目、国分本町7丁目、国分東条町所在の明神山系を中心とした埋蔵文化財分布調査概報である。今回の調査は、2年計画の初年度にあたるものである。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課・安村俊史を担当者とし、昭和59年11月9日に着手し、昭和60年3月31日をもって終了した。
3. 本書の編集・執筆・製図・写真はすべて安村が当たった。
4. 調査に際して、土地の立ち入り等を許可して頂いた地元の方々に深く感謝する。今後とも協力をお願いしたい。
5. 調査、整理に際しての協力者は下記の通りである。

|       |      |       |      |       |
|-------|------|-------|------|-------|
| 石田 博  | 竹下 賢 | 田中久雄  | 北野 重 | 桑野一幸  |
| 松田光代  | 筮井京子 | 松村富子  | 秋田大介 | 石田成年  |
| 伊藤芳匡  | 今中太郎 | 小野民裕  | 清瀧健二 | 辻元登志夫 |
| 浜田延充  | 森田好則 | 褐本一高  | 奥野 清 | 道旗甚藏  |
| 麻 栄三郎 | 朝田行雄 | 井上岩次郎 | 谷口鉄治 | 分才春信  |
| 森口喜信  | 山田貞一 | 川端長三郎 | 西岡式重 | 山本芳一  |

## 目　　次

|                |   |
|----------------|---|
| 第1章 分布調査の目的と方法 | 1 |
| 第2章 分布調査の成果    | 3 |
| 第3章 松岳山古墳墳丘測量  | 9 |

# 第1章 分布調査の目的と方法

柏原市では、周知の遺跡の密度が非常に高く、大和川、石川、原川の各河川沿いの地域と旧大和川の流路にあたる部分以外は、ほとんど遺跡が確認されている。ところが、柏原市南東部の明神山から南へ続く山地では遺跡が確認されておらず、空白地となっている。この地域は、大和川の南岸、金剛生駒山地の西斜面にあたる。山地の稜線は府県境となっており、奈良県香芝町に隣接する。しかし、この地域に全く遺跡が存在しないとは考え難いのである。なぜならば、大和川の対岸には日本最大といわれる平尾山古墳群が存在し、この地域のすぐ西側でも1982年に古墳から火葬墓へ展開する田辺古墳・古墓群が発見されているからである。更に、この地域には東から東条尾平廃寺、河内国分寺、国分尼寺、田辺廃寺の各古代寺院跡が存在するにもかかわらず、田辺廃寺以外は周辺地域に集落の存在さえ確認されていない。国分寺から国分尼寺を通り、国府方面へ、あるいは駒ヶ谷方面へと続く道があったと想定されているが、その道の実態も把握できていない。

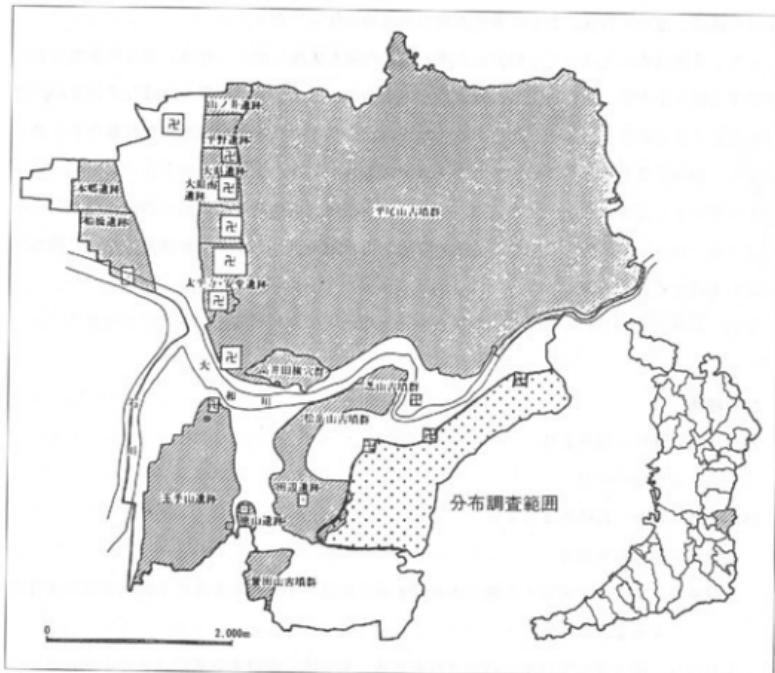


図 1 分布調査地位置図

ところが、この地域にも開発の波が押し寄せ、十分な調査を行なうこともできずに未確認の遺跡が破壊される危険性がある。田辺古墳・古墓群も宅地造成に先立つ調査で発見されたものであり、横穴式石室、小形石室、木棺墓、火葬墓と続く墓域は、有力氏族田辺氏の代々の墓域と推定されている。このような重要な遺跡も、山を削り、削った土で谷を埋める大造工事のために、再三にわたる協議にもかかわらず、破壊のやむなきに至った。また、道路建設においても、この地域の南部を西名阪自動車道が横断し、更に新たに道路を建設する計画もある。このような開発に対し、事前に十分な協議を行なえるような資料を早急に作成し、遺跡の保存策を講じるために今回の分布調査を実施することになった。

調査に際して、存在する可能性のある遺跡の種類をあげると、弥生時代の集落、古墳、とりわけ後期古墳、火葬墓、寺院周辺の集落、寺院に伴う瓦窯、中世山城などがあげられる。これらの遺跡を発見するために、調査対象地を30地区に分割し、1日に1地区を踏査する方法をとった。もちろん、遺跡が発見された場合は1地区に数日を費すことを前提としている。

調査には2~5名あたり、現地で欠かさず記録、写真撮影等を行なった。調査の際に注意した点は、崖面等の土層観察、遺跡が存在する可能性のある地形の検討、古墳のマウンドや石室材の露頭、遺物の表採、とくに果樹園内の遺物表採等である。

また、分布調査に先立って、松岳山古墳の墳丘測量を実施した。これは、調査対象地の北に位置する松岳山古墳の南側で生じた地崩れが、松岳山古墳の墳丘に影響を及ぼしていないかどうか調査する必要性があったためである。地崩れは松岳山古墳南側の国分神社神殿のすぐ裏で発生し、1984年7月・8月に応急の防災工事が行なわれたが、十分なものでないために、墳丘にも影響が生じる可能性が考えられた。そこで、松岳山古墳の範囲と地崩れ部分の関係を明らかにするために墳丘測量を実施した。そのため、墳丘測量図、および墳丘測量によって得た知見等も本書で報告する。

なお、現状の資料として航空写真撮影を実施した。今後、利用していきたいと考えている。

## 調査経過

1984年11月9日~12月8日

松岳山古墳墳丘測量。

1984年12月10日~1985年3月4日

明神山系遺跡分布調査

1月9日 第8区で開口する横穴式石室4基を確認。小形石室を含め十数基の古墳が存在するようである。

1月11日 第3区で開口する横穴式石室2基、第9区で開口する横穴式石室1基を確認。

## 第2章 分布調査の成果

分布調査範囲を道、地形などによって30区に区分し、本年度の調査として第1～20区の分布調査を実施した。以下、地区毎に調査成果を記述していく。(図版1)

### 1. 成果

#### 第1区

針葉樹林とぶどう畠がみられる。針葉樹林内では小さな崖面等の土層観察を行なったが、遺物は認められなかった。ぶどう畠内では表面観察を行ない、サヌカイトの原石を3点採集したが、いずれも加工痕は認められない。

#### 第2区 (図版2・3)

北東頂部から南斜面へ下り、梅林、ぶどう畠を表面観察した。地形は西名阪自動車道が通過する谷へ傾斜する南斜面である。ぶどう畠内の西名阪自動車道に近い部分、すなわち標高の低い部分に若干の須恵器・土師器片が散布する。特に、西名阪自動車道に隣接する東西方向の農道に面する崖面に、土師器片が集中していた。土師器出土地点は10cm前後の自然石が多く、遺構の可能性が考えられる。遺物は実測図に示した縫のほか、杯などがみられる。縫は体部が球形を呈すると思われ、口縁部は外反し、口縁端部は直立気味に肥厚する。口径17.4cm。外面上半タテ方向のハケメ、下半はナデと思われる。内面はナデ、口縁部はヨコナデを施す。遺物の時期は8世紀頃と思われる。

遺物出土地点から西側は針葉樹林となり、遺物・遺構は認められなかった。遺物出土地付近は平坦面がみられないことから集落の存在は考え難く、墳墓域の可能性が考えられる。

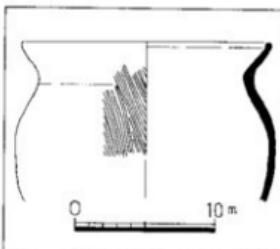


図2 第2区出土縫実測図

#### 第3区 (図版2・4・5)

第2区に隣接するぶどう畠内で、やはり土師器・須恵器片を少量採集した。時期は不明だが、第2区に関連すると思える。

第3区踏査の際には、他に遺物・遺構は発見できなかった。しかし、後日、やや道に迷い、第3区内を歩いている時に古墳を2基発見した。地点は第3区の北東部分にあたり、谷川に面する東斜面にあたる。2基の古墳について、南側の1基を3区-1号墳、北側の1基を3区-2号墳と仮称する。踏査の際には万全を期しているつもりであったが、見落としていたことによって、改めて分布調査の重要性と困難さを知らされた思いがする。後日とはいえ、発見できることは幸いであった。

3区-1号墳は円墳の墳形を良く残しており、数十cmの深さの周溝がめぐる。直径は約12mである。内部主体は横穴式石室で、南々東に開口している。左片袖式の石室は、やや大きい自然石を3~4段に積んで構築している。玄室の天井石は3枚、羨道の天井石は2枚である。玄室長320cm、奥壁での幅160cm、高さ180cm、羨道長220cm、幅140cmを測る。石室の遺存状態も良好である。

3区-2号墳は墳形不明、横穴式石室を内部主体とし、玄室・羨道の境付近の天井石が動いており、その部分から中に入ることができる。玄室の天井石は2枚残っており、元は3枚であったと考えられる。羨道部分は埋まっており、袖の有無、羨道の規模は不明。玄室長305cm以上、奥壁での幅180cm、高さ215cm。1号墳よりやや大きい。

周辺を縦密に観察したが、2基以外に開口する石室は全くなく、墳丘らしきものもみられなかった。

#### 第4区

針葉樹林が多く、起伏の激しい地形である。一部に花崗岩の巨石が露頭しており、石室材かと思われるものもあるが、古墳と確認できるものはなかった。将来的に古墳が発見される可能性を残している地区である。

#### 第5区

ぶどう畑の多い地区である。南東の標高の高い部分で幅約10m、長さ約30mにわたる土砂崩れが認められ、断面、流失土を精査したが、遺物・遺構は認められなかった。第5区の西方では田辺古墳・古墓群が確認されており、第5区にも続いている可能性がある。

#### 第6区

標高174mの最高地点西斜面でかなり大規模な造成が行なわれ、ぶどう畑に利用されている。黄褐色の地山をえぐられたぶどう畑は、近鉄国分駅付近からもはっきり確認できる。断面を丁寧に観察したが、遺物・遺構は認められなかった。しかし、自然環境、緑地保全の観点から考えると残念である。

最高地点の南斜面で花崗岩の巨石の墓頭が確認された。古墳の可能性が考えられる。それ以外には、遺物は全く認められなかった。

#### 第7区

東から西へのびる尾根筋にあたる。針葉樹林、荒地が大部分を占め、十分な観察ができなかった。遺物・遺構は認められなかった。

#### 第8区（図版6~11）

南へ張り出す小尾根部分にあたり、その北東部、東斜面で十数基から構成されると思える古墳群を発見した。第8区・9区の境は道路になっているが、本来は現西名阪自動車道付近へ広がるやや大規模な谷であったと考えられる。

確實に古墳と確認できるものは4基の横穴式石室墳と3基の小形石室墳である。横穴式石室墳を南から順に8区-1～4号墳、小形石室墳を東から順に8区-5～7号墳とする。

8区-1号墳は羨道部分がやや破壊されている。玄室長410cm以上、奥壁での幅95cm、高さ125cm。100cm前後の自然石を乱石積みに構築しており、天井石は3枚残っている。左側壁の入口近くに線刻が認められ、帆船に人物が乗っているように見えるが、線が細く、浅いため、落書きの可能性も十分に考えられる。開口方向は南々西である。

8区-2号墳も、羨道の状態が不明である。玄室長270cm以上、奥壁での幅105cm、高さ95cm。50～100cmの自然石乱石積みで、天井石は3枚からなる。開口方向は南。

8区-3号墳は両袖式の石室である。玄室長315cm、奥壁での幅170cm、高さ145cm、羨道長350cm、幅116cm、高さ106cm。100cm前後の自然石を乱石積みにし、玄室の天井石は3枚である。左奥壁隅部分は、奥壁と左側壁の石材を交互に積んでいる。右側壁の羨道近くに、格子状の線刻が認められるが、これも落書きの可能性がある。開口方向は南。

8区-4号墳は右片袖の石室である。玄室長230cm、幅145cm、高さ166cm、羨道長220cm、幅116cm、高さ140cm。50～100cmの自然石を乱石積みにしているが、石の隙間には薄い削石をつめている。また、石室内面には自然石の平滑な面を向けていているが、面を揃えるため、自然石の表面をノミ状の工具で削り取っている石がみられる。この技法は他の石室においても若干認められるが、8区-4号墳において顕著である。

以上4基の古墳は、直径10～15m程度の円墳と考えられるが、封土は流失が激しい。これら4基以外にも、破壊された石室や墳丘の高まりが多く認められ、横穴式石室墳だけで10基前後存在するとと思える。

8区-5号墳は堅穴系の小形石室であり、石室長160cm、幅70cmと推定される。人頭大の自然石によって築かれている。主軸は北々東～南々西である。

8区-6号墳も同様の石室で、石室長180cm、幅70cmと推定される。北西隅部分が良く遺存しており、30～40cmの自然石の平滑な面を石室内面に向けて、長方形の石室を築いていることがわかる。しかし、側壁が1段のみであるか、2段以上であるかは確認していない。石室は、50cm前後の自然石4個で覆われている。

8区-7号墳も6号墳とほぼ同じ規模である。

小形石室墳は、墳形、墳丘の規模などが不明であるが、石室が露頭していることから、ほとんど墳丘をもたなかつたと推定される。横穴式石室墳から小形石室墳へと移行したことは間違いないと思われるが、群集墳で一般にみられるような尾根筋に標高の高い部分から順次築造される例と異なり、谷斜面の標高の低い部分から順に築造されているようである。しかも、谷の前面には集落が存在するスペースは考えられず、あたかも、人目を忍んで古墳を築造していたかのように思われる。

### 第9区（図版6・12）

第8区と道路を隔てた向い側、西斜面で古墳を1基確認した。第8区と同一のグループと考えられるが、古墳の周囲では他の古墳は確認できなかった。また、過去に香芝町との境界付近で2基の古墳が発見されている。この2基の古墳を9区-1・2号墳、新発見の古墳を9区-3号墳とする。

9区-1・2号墳は、直径5m程度の土まんじゅうのような高まりが2つならんでいる。花崗岩の自然石も見られるが、古墳ではない可能性も考えられる。2基の周囲を端念に歩いたが、他に古墳と確認できるものはなかった。2基が古墳であるならば、おそらく小形石室を有する新しい時期のものであろう。

9区-3号墳は、横穴式石室を内部主体とする直径10~12mの円墳である。100~150cmの大形の石材を使用した乱石積みで、奥壁で3段に積んでいる。玄室の天井石は2枚、羨道の天井石も2枚である。玄室長は308cm、奥幅180cm、羨道に近い部分での幅200cm、天井部の奥壁での幅140cm、玄室高160cm、羨道長310cm、幅140cm、高さ128cm。若干、土砂が流入している。開口方向は南西。天井石まで完存するにもかかわらず、墳丘の高まりは明瞭でなく、かなり土砂が堆積しているものと考えられる。9区-3号墳の周辺では、他に古墳は確認できなかったが、土砂に埋もれている可能性も考えられる。

### 第10区

東條墓地の周囲にあたる。墓地の周囲には道路が建設され、開発が進んできた地区である。しかし、これまでに遺物が発見されたことはなく、今回の分布調査でも遺物は採集されていない。

### 第11区

国分尼寺、およびその南西部分にあたる。国分尼寺は小字名や瓦の出土からその存在が推定されており、1983年に複弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土したところからその存在はほぼ間違いないと考えられる。しかし、依然としてその伽藍は不明である。

第11区は古くから東條集落となっているため、表面観察できる部分は少なかった。わずかに、ぶどう畑から土師器小片を表探したのみである。

### 第12区（図版13・14）

第12区は畑が多いが、分布調査による成果はなかった。しかし、調査範囲外の第12区北側のぶどう畑で、横穴式石室かと思えるものを発見した。崖面に自然石を積み上げ巨石をのせた石室状の断面がみられる。幅は145cm、高さ110cmをはかり、主軸は南々西を向いている。墳丘は確認できなかったが、古墳の可能性が考えられる。標高は40mと非常に低い。

また、その東側の平地は、遺跡の存在が考えられ、国分寺の調査の際にも注目されている台地である。

## 第13区

梅林やぶどう畠の多い地区である。第13区の南端、第14区との境界付近で須恵器の高杯の破片を1点表採したが、時期は不明。また、その近くの石垣に、薄い安山岩の割石が多用されている部分がある。安山岩は、堅穴式石室材ではないかと思われるものであり、他の石垣には花崗岩等の自然石しか使用されていない事実と比較すると、注目しておく必要がある。

## 第14区

杉林が多く、傾斜が非常に強い。花崗岩の巨石が各所で認められ、石室材ではないかと周辺を観察したが、古墳と確認できるものはなかった。北側斜面であることや傾斜が強いことを考えると、古墳が存在する可能性は少ないと考えられる。第14区から第8区付近にかけて、巨石が多く認められる。第8区の古墳群は、これらの石材を利用して築かれていると判断される。

## 第15区

傾斜が強く、荒れ地が多い。部分的に花崗岩の巨石が露頭しており、石室材かと思われるものもあるが、石室と考えられるものはなかった。遺物・遺構は、まったく確認できなかった。

## 第16区

第14・15区と同様に、急傾斜面が多い。遺物は、土師器小片を1点採集したが、時期は不明である。また、花崗岩の巨石はやや少なくなる。山裾は、みかん畠、梅林となっているが、遺物は認められなかった。

## 第17区（図版13・14）

国分寺塔跡を含む範囲である。塔跡北側の畑で、平瓦片数十点を表採した。いずれも、粗い繩目叩きを有する一枚作であり、国分寺の塔に伴うものと考えられる。しかし、土器は全く採集できなかった。塔跡の南側は急斜面となっており、古墳の存在は考え難い。

## 第18区

眺望のよい所ではあるが、急傾斜面となっており、しかも地盤が弱いためか、地崩れが各所でみられる。遺構・遺物は認められず、古墳の存在も考えられない。将来、大規模な地崩れが生じる可能性も考えられ、開発の許されない地区である。

## 第19区

第18区と同様の地形を呈する。尾根上には平坦地もみられるが、古墳を思わせる巨石も認められず、古墳の存在は考えられない。

## 第20区

稜線上にあたり、緩斜面も多い。巨石の露頭も認められ、古墳が存在してもおかしくない地区であるが、古墳は確認できなかった。遺物も全く認められない。新設の鉄塔があり、削土の著しい部分もある。

## 2.まとめ

分布調査の成果を改めてまとめておくと、下記のようになる。

### 第2・3区

境界付近のふどう畑に土器散布。特に、南端に土師器片が集中する地点がある。

### 第3区

横穴式石室を主体とする古墳2基発見。

### 第8区

横穴式石室を主体とする古墳4基以上。

小形石室を主体とする古墳3基以上。

### 第9区

横穴式石室を主体とする古墳1基。過去に発見されている2基とあわせ、計3基。

### 第12区

範囲北側で石室と思える石組み。

### 第17区

国分寺塔跡周辺の畠内で、平瓦表採。

昭和59年度の分布調査範囲内では、以上のような成果があった。調査範囲南半では、未発見の古墳を含めると20基以上に達すると思われ、小形石室も発見されていることから、かなりの期間、古墳の築造が行なわれていたと考えられる。しかし、調査範囲北半では、あまり成果があがらなかった。唯一、第12区北側で石室らしきものを確認したが、古墳と断定できるものではない。国分寺・国分尼寺周辺にも、土器はほとんど散布していない。また、国分寺南側の斜面は、急斜面が多く、古墳の存在は考え難い。

調査範囲の北を流れる大和川は、古墳時代から奈良時代にかけて、華やかな歴史の舞台となつたと考えられるが、明神山系は、あまり人々が足を踏み入れることがなかつたのではないかと考えられる。古代以来の姿を留めている山々も、開墾、植林、その後の放置などによって、かなり荒れている。山と川に代表される豊かな自然環境に恵まれている柏原市の特性を、今後も生かしていくいかねばならない。そのために、開発行為は認められるものではない。文化財の面からは、国分寺周辺の環境保全と、新発見の古墳群の保護に注目したい。

昭和60年度は、調査範囲東半（第21～30区）の分布調査を予定している。それと共に、59年度の分布調査で発見された古墳の測量や石室の実測も計画している。明神山系の埋蔵文化財、そして自然環境の保護のために、本書が利用されることを望んでやまない。

## 第3章 松岳山古墳墳丘測量

### 1. 測量の概要

松岳山古墳は、大和川南岸に位置する前方後円墳であり、周辺の数基の円墳を含めて松岳山古墳群と呼称される。美山古墳とも呼ばれる松岳山古墳は、古墳群中、唯一の前方後円墳であり、東西にのびる小丘陵の最頂部に後円頂部をおく。後円頂部の標高は73.5m、大和川水面からの比高差は約60mになる。

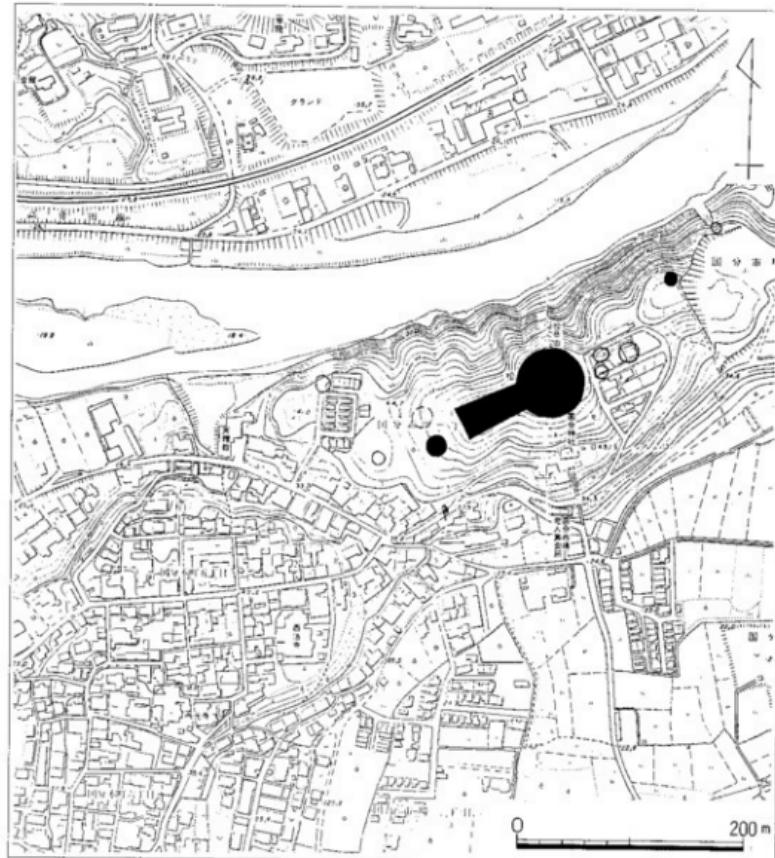


図 3 松岳山古墳位置図

松岳山古墳は大正11年に国史跡に指定されており、昭和29・30年には小林行雄氏らを中心とした墳丘測量と石棺周辺の調査が実施されている。後円頂部には蓋石1枚、底石1枚、側石4枚からなる組合式石棺が露出している。この石棺は、蓋石と底石には花崗岩を使用し、側石には凝灰岩を使用している。底石には円形の枕形を掘り込み、中央もやや彫りくぼめである。長持形石棺の銀形として注目されるものである。石棺の南北には副葬品を納めていたと推定される小石室状の空間があるが、古くに盗掘を受けていたようである。石棺の周辺には安山岩の板石が散乱しており、竪穴式石室状の石棺を覆う施設があったと推定される。また、石棺からやや離れて南と北に、小円孔を穿つ等の細工をした方形の板石が立っている。諸説あるが、今だにその用途は解明されていない。

昭和30年の調査時に、石棺の周辺から硬玉製勾玉1点、碧玉製管玉約20点、碧玉製丸玉1点、ガラス製小玉17点、碧玉製鉢形石1点、碧玉製石釧27点以上、銅鏡3点、鐵鏡破片多数、刀破片多数、劍破片多数、鍔先7点、鎌破片6点、土飾器破片若干が出土している。<sup>(1)</sup>

また明治10年に堺県令税所篤が松岳山古墳とその東に位置する東ノ大塚古墳を発掘したという記録が残っており、松岳山古墳の石棺内から若干の石製品と、石棺外から鏡2面、玉類、劍などが出土したようである。

松岳山古墳の西には、数基の円墳が存在したようである。昭和59年12月に、松岳山古墳の前方端部に接する位置で、農作業中に竪穴式石室が発見され、石室内から彷彿の三角縁獸文帶三神三獸鏡1面、碧玉製鉢形石3点以上、碧玉製車輪石3点、碧玉製石釧15点以上、劍小破片などが発見されたが、その出土位置等は不明である。この円墳は茶臼塚古墳と仮称され、地形から約20mの円墳と推定される。竪穴式石室は安山岩の板石を持ち送りに小口積みしたものであり、粘土棺床の形から割竹形木棺を安置していたと判断できる。粘土棺床の上面には石英等の白色礫が敷かれており、これはかつて松岳山古墳後円頂部に敷かれていたとされる白色礫<sup>(2)</sup>と同質のものである。

また、小字向井山茶臼塚出土と伝えられる舶載鏡が3面あり、現在大阪市立美術館が保管している。3面は徐州銘三角縁四神四獸鏡、吾作銘三角縁四神二獸鏡、青蓋作銘盤龍鏡である。

この2基の古墳以外にも、古地図に市場茶臼塚古墳などが記されている。

松岳山古墳の東側はヌク谷と呼ばれ、やはり数基の円墳が存在したが、宅地開発によって消滅した。ヌク谷北塚古墳は円墳と推定され、粘土模にコウヤマキ製の割竹形木棺を納めたものである。棺の内外から三角縁獸文帶三神三獸鏡2面、二神二獸鏡1面、硬玉製勾玉6点、碧玉製管玉110点、碧玉製石釧5点、碧玉製栓形石製品1点、刀破片5点、矛1点、細ノミ状鉄製品1点などが出土している。<sup>(3)</sup>

南塚古墳は竪穴式石室を内部主体とする直徑約11mの円墳と推定されている。鐵製刀子1点、碧玉製管玉2点、瑪瑙製丸玉1点が出土している。

東ノ大塚古墳は直径約30mの円墳で、竪穴式石室を内部主体とした。銅鏡片、碧玉製車輪石5点、碧玉製鍬形石1点、碧玉製舟車形石製品が1点出土している。

松岳山古墳群には、他にも数基の古墳が存在したようであり、ほぼ西側から東側へと順次築造されたように推定される。しかし、松岳山古墳のみが前方後円墳の型式をとり、規模が突出している点、更には小円墳でありながらも竪穴式石室を内部主体とし、豊富な副葬品を出土するという点で不明な部分の多い古墳群である。松岳山古墳群の西方に位置する平手山古墳群、更には中期の古市古墳群と比較した場合、その特異性は更に浮き彫りにされる。

その松岳山古墳の南斜面下方で地崩れが生じた。地崩れ地点は国分神社神殿のすぐ裏にあたり、幅数十m、高さ数mにわたり起つたものである。地崩れの応急処置は昭和59年夏に行なわれたが、柏原市教育委員会では地崩れ部分が墳丘に影響を及ぼしていないかどうか判断するために、墳丘測量を実施することにした。松岳山古墳では昭和29年に墳丘測量が行なわれているが、標高が示されておらず、等高線の間隔も1mとなっている。また、その後の地形改変も考えられるため、改めて墳丘測量を行なうこととしたものである。

墳丘測量の標高は建設省の水準点を基準としたT.P.である。等高線の間隔は25cmとしたが、測量図の縮尺の関係で、本報告では50cm間隔とした。50cm間隔の等高線で古墳の形状は十分に表わしていると思えるが、25cm間隔の測量図も利用して頂きたい。また、地崩れ部分との関係を重視したために、墳丘南側を重点的に測量した。前方部北西部分は、雑草等の影響で十分な測量が行なえなかった。

測量に際して協力して頂いた土地所有者であり、国分神社の宮司でもある数井義夫氏、および地元関係者らに深く感謝する。墳丘測量図が松岳山古墳の保存に活用されることによって、その御礼としたい。

#### 註

- (1) 小林行雄『河内松岳山古墳の調査』大阪府教育委員会 1957
- (2) 安村俊史『茶臼塚古墳』『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1984年度』柏原市教育委員会 1985
- (3) 北野耕平ほか「国分タク谷北塚古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊 1964

## 2. 墳丘測量の成果（図版16～19）

松岳山古墳は、大和川に沿って東西にのびる丘陵上に築かれている。前方部を西南西に向け、後円頂部の石棺は墳丘主軸にはば直交するが、やや西に振っているようである。石棺の主軸はN25°Wである。墳丘、および周辺には5箇所の方形の掘り込みがある。何の目的のために掘られたのか不明であるが、樹木の成長から考えると少なくとも数十年前には掘られていたと考えられる。また、前方部前面はV字状に約1m掘り下げられている。これも古くに、竹林として利用するために開墾されたものである。このため、前方部端の位置、形状の判断に困難を生じている。それ以外は、大きな地形変容の後は認められず、墳丘の自然崩壊が考えられるのみである。現状は、竹林以外は広葉樹に覆われている。松岳山の名称から推測すると、かつては松が多かったのであろうと考えられるが、現在は巧ち果てた松の樹が十数本残っているだけである。

松岳山古墳の規模は、昭和29年の測量調査によって、墳丘全長約120m、後円部径約60m、後円部高約13m、前方部幅約35m、前方部高約5mと復元されている。今回の測量調査によつてこの數値を検討してみると、直径60m、高さ13mの後円部基底線は60.5mの等高線にはば一致することになる。しかし、後円部北斜面は62mの等高線より北側で急傾斜面をなし、墳丘の一部とは考え難い。後円部の傾斜角は全体に26°前後であるが、62m等高線以北は50°近い傾斜面となる。62m等高線の内側には里道も通つておらず、後円部基底部に存在したであろう若干の平坦面を考慮すると、63～63.5m付近が後円部の基底部にあたると考えられる。これを元に後円部の規模を復元すると、直径53m前後、高さ10.5m前後と推定される。

前方部高が5mとすると、前方部基底部は58mの等高線付近となり、幅は約33mと復元され、ほぼ実状に近いと推定される。前方部の傾斜角は25°前後と復元される。このように復元すると、全長は約110mとなり、過去の復元値よりやや小さくなる。この差は後円部の復元の差に起因するものであり、今回の復元値がより実態に近いと考える。

また、前方部と後円部の基底部比高差が約5mとなり、自然地形による制約が大きかったことがわかる。おそらく、前方部のみに下方に一段付加されたような墳形であると推定される。段築は墳丘測量図、現状からは確認できない。しかし、後円部の65m等高線付近で円筒埴輪のやや大きな破片を数点表探し、その中に少なからず底部の破片が含まれていたことから推定すると、65m等高線付近に埴輪列がめぐっていたと推定される。この部分にテラスがめぐっていたとすると、基底部から数えて一段目のテラスと考えられ、後円部全体では四段前後の段築があったと推定される。前方部は二段以上の段築であろう。

松岳山古墳では、推定した基底部より下方でも、墳丘と同様の等高線がめぐっている。そのために墳丘基底部の判断に差が生じるのであるが、基底部より下方でも大規模な整形が行なわれているとは考え難い。おそらく、本来の地形を最大限に利用したためであろう。古墳のア

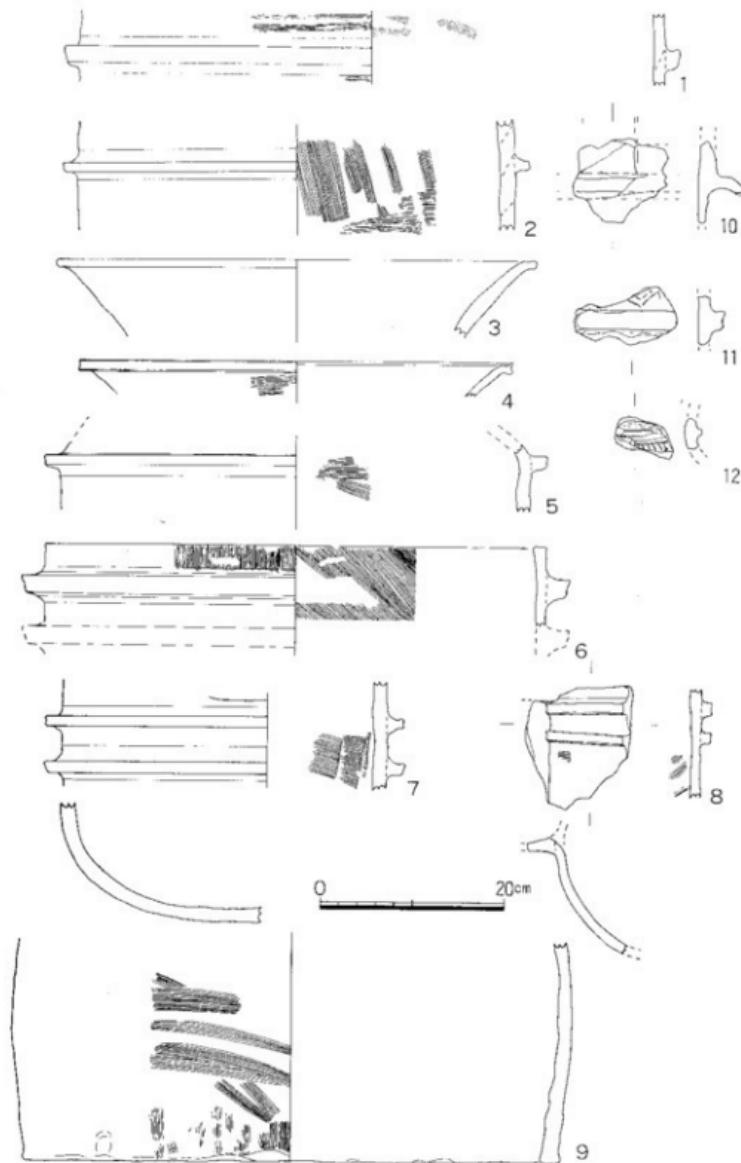


図4 松岳山古墳埴輪実測図

ンも、地形を有効に利用するために決められたものであり、他の古墳のプランを適用したようなことは考え難い。そのために前方部と後円部の比高差も大きくなつたと思われる。松岳山古墳の位置する部分は、古墳築造以前から前方後円墳のような地形であったと推定される。

葺石は残存している部分が少ないが、興味ある葺き方をしている。小林行雄氏も既に注目しているが、墳丘の上部は安山岩の板石を小口積みにしており、裏込めとして礫をつめている部分も観察できる。これは竪穴式石室の構築技術と共通するものであり、墳丘上面に散乱しているおびただしい量の板石と共に考えると、松岳山古墳築造者が安山岩の板石、あるいは竪穴式石室の構築法にかなり重点をおいていたものと推定される。墳丘下部では、明瞭ではないが、一般に見られるような自然石の葺石であったようである。

次に、松岳山古墳に伴うと考えられる埴輪について観察してみる。これらの埴輪は昭和59年夏の地崩れ対策工事の際に採集したものと、墳丘測量中に表採したものである。

1・2は、円筒埴輪の体部である。直径はそれぞれ66.4cm、50.4cmと復元される。1は凸帯がやや厚く、断面正方形を呈し、外面はヨコハケ、内面はハケとナデによる調整。2は凸帯が薄く突出し、外面ナデ、内面タテハケ調整。これ以外にも、凸帯が厚く、凸帶上下面がそれぞれ四面をなすようなタイプのものもあり、バラエティーに富んでいる。

3・4は、朝顔形埴輪の口縁部。3は口縁端部上面および端面が平坦面をなす。内外面共にナデ調整。4は口縁端部上面と端面が凹面状にくぼみ、その結果、上方にややつまみあげたようになる。外面ヨコハケからナデ、内面ナデ調整。

5は、朝顔形埴輪肩部。凸帯断面は正方形をなし、外面ナデ、内面ヨコハケからナデ調整。

6は、円筒埴輪の口縁部として復元したが、下端の形状から凸帯が2本接してめぐるものと推定され、このようなタイプの埴輪は楕円形埴輪に限られることから、楕円形埴輪の口縁部である可能性を残す。口縁部は体部から垂直に立ち上がり、端部は平坦面をなす。外面タテハケ、内面左上がりのハケメ。

7・8は、楕円形埴輪の体部。7は長径50cm、短径30cm前後と推定され、円形かと思える透し孔の一部が残る。凸帯は2本が接してめぐる。8は楕円形埴輪にヒレの伴うものである。ヒレ上端は上方の凸帶上端と一致する。

9は、円筒埴輪底部。復元径58.4cm。外面ハケメ、内面ナデ調整。後円部65m付近表採。

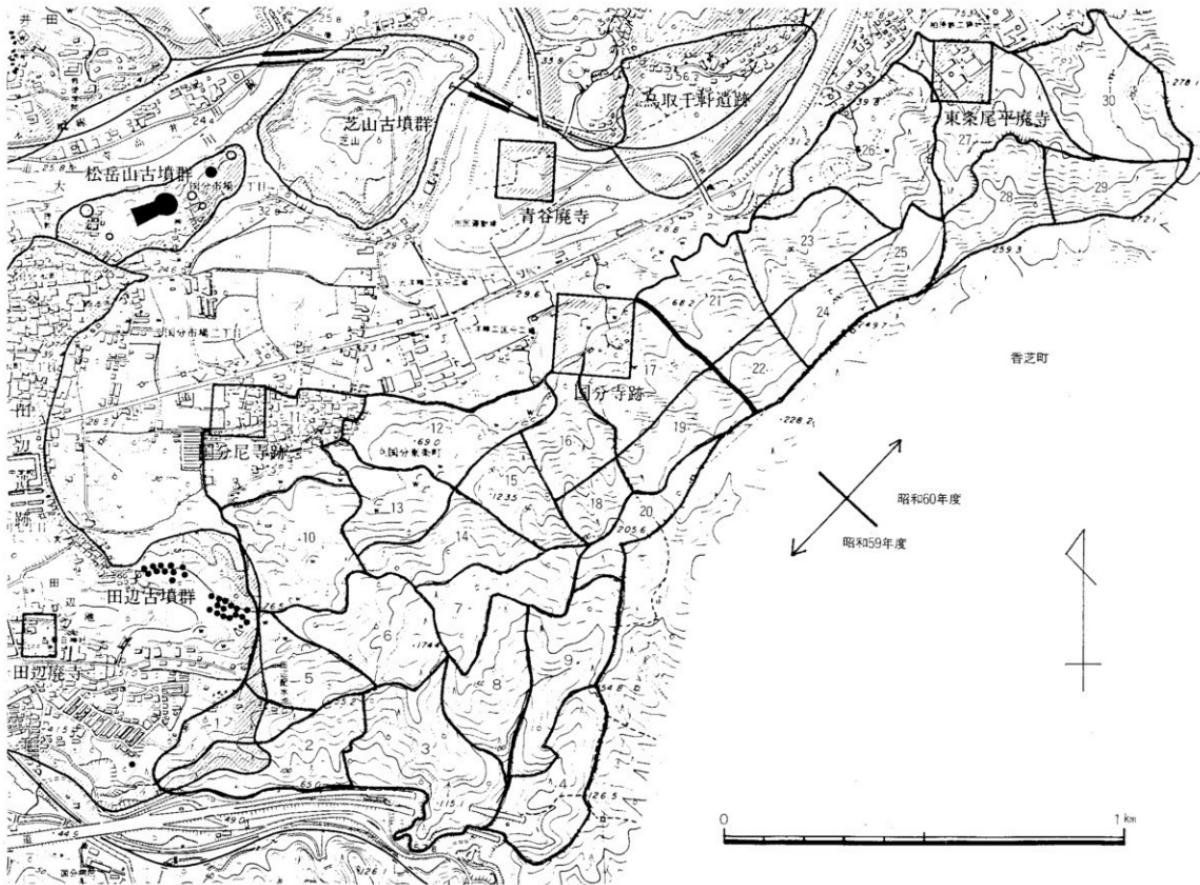
10は、家形埴輪の床部分と考えられ、幅6cmで上下にのびる段は柱を表現したものであろう。

11は、綾杉状の線刻を有する破片である。

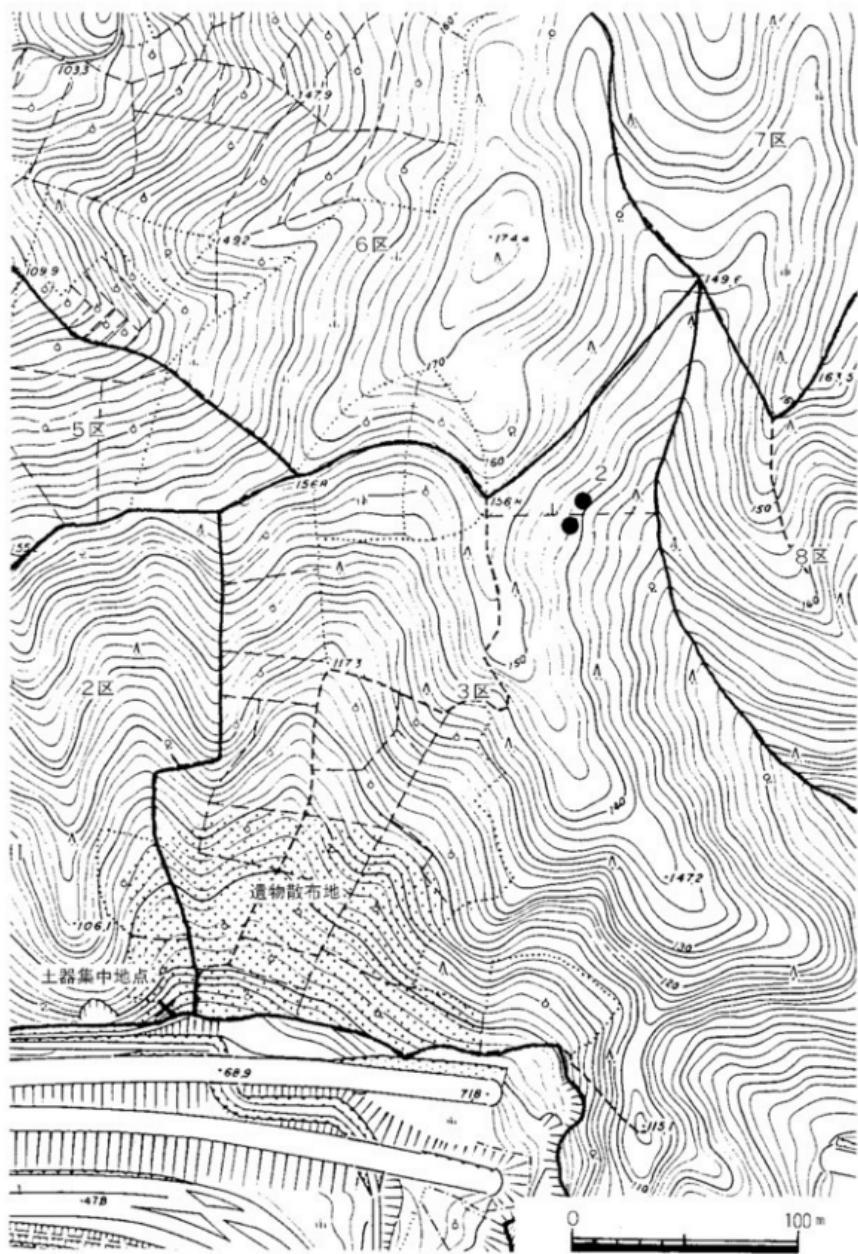
12は、朝顔形埴輪の頸部のように弯曲する破片であるが、凸帯が小さく、凸帶下に横方向の綾杉状の線刻が施されている。草摺形埴輪の一部ではないかと考えられる。

松岳山古墳の埴輪は、やや大形のものが多く、楕円形埴輪を伴うなど、玉手山古墳群には見られない特徴を有している。

# 図 版



図版2 第2・3区遺跡発見地点





近 景



石 列



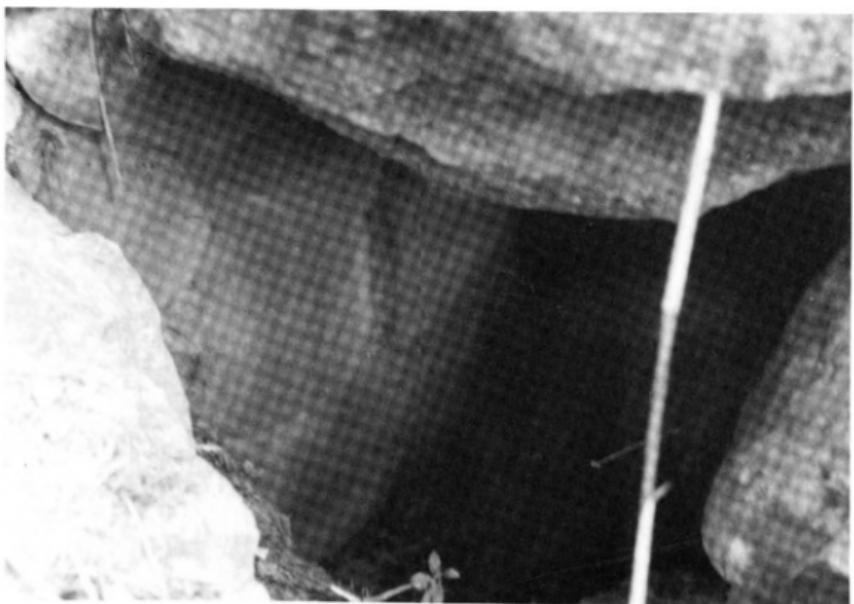
石室開口部



墳丘

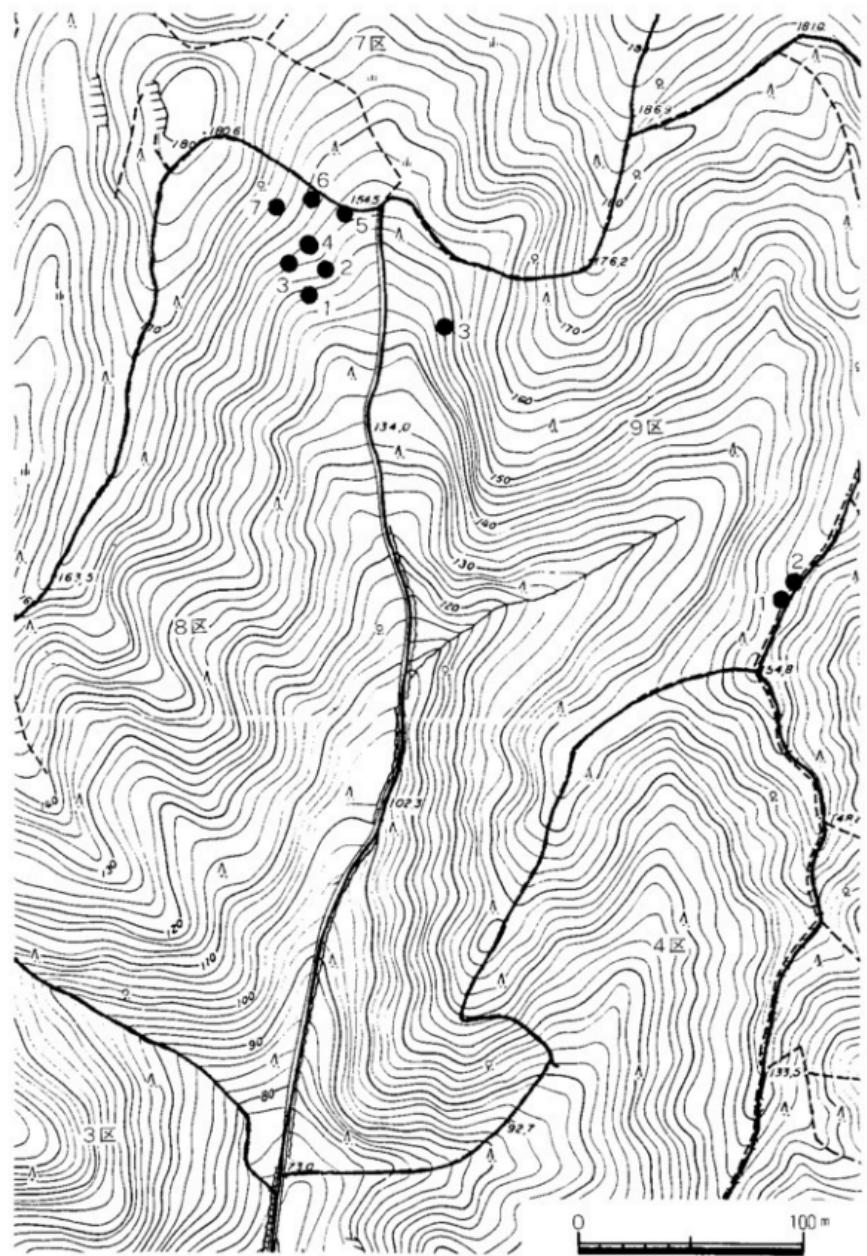


石室開口部



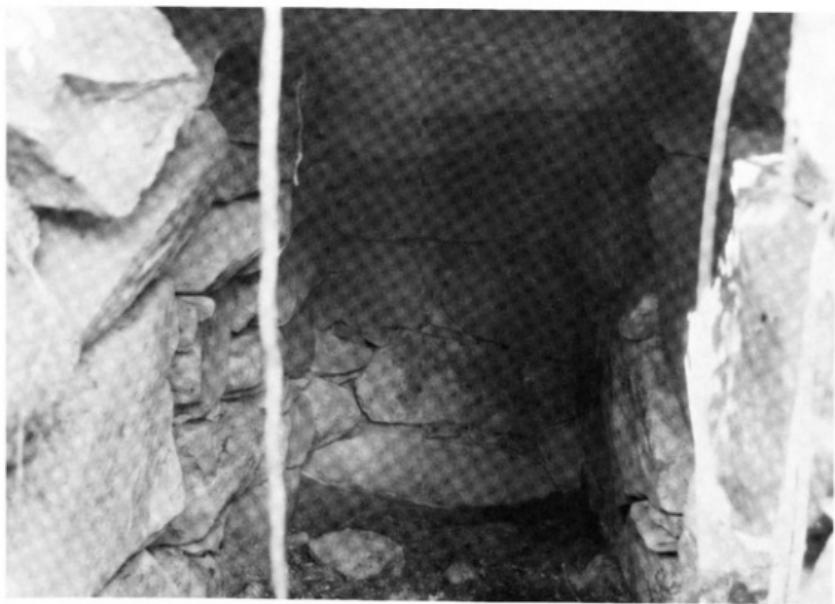
石室内

図版6 第8・9区古墳発見地点





石室開口部



石室内



石室開口部



石室内



石室開口部



石室内



石室開口部



石室内



8区—5号墳



8区—6号墳

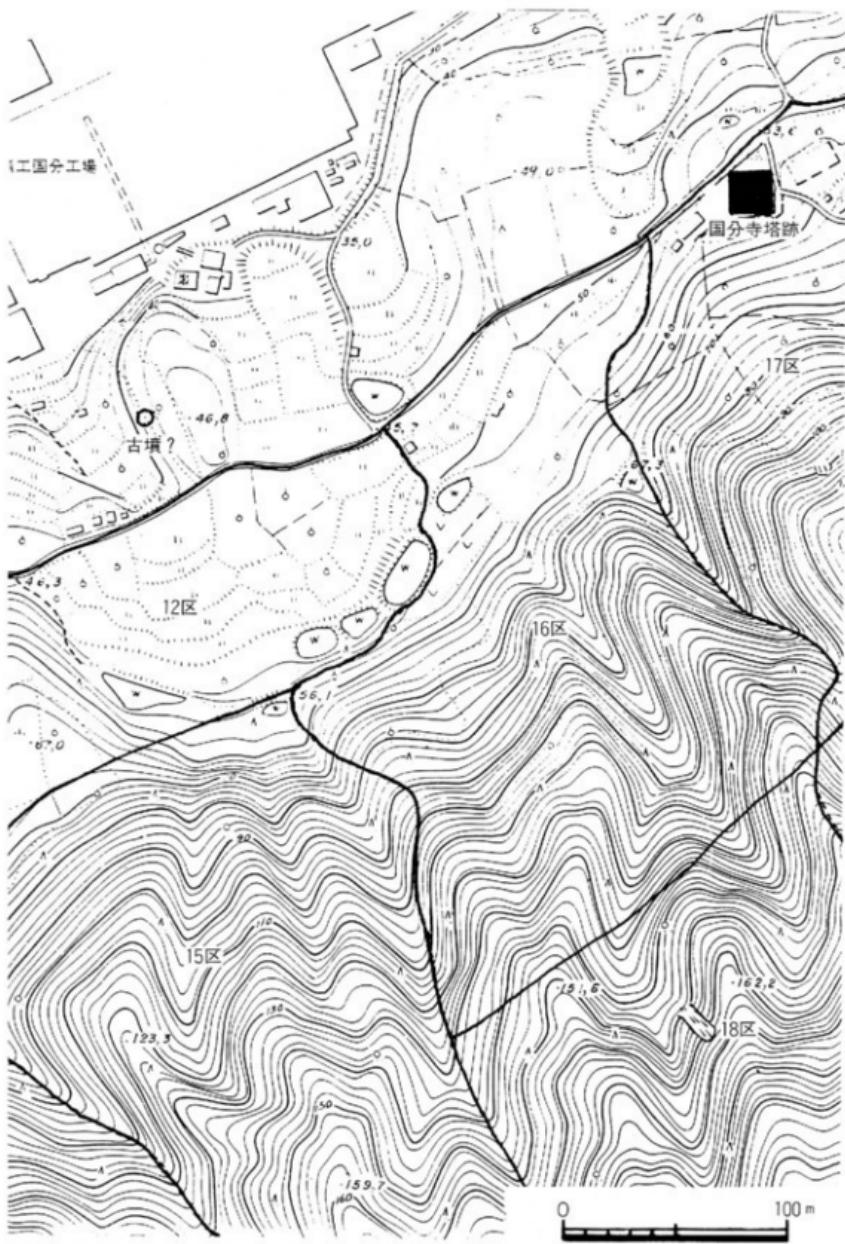


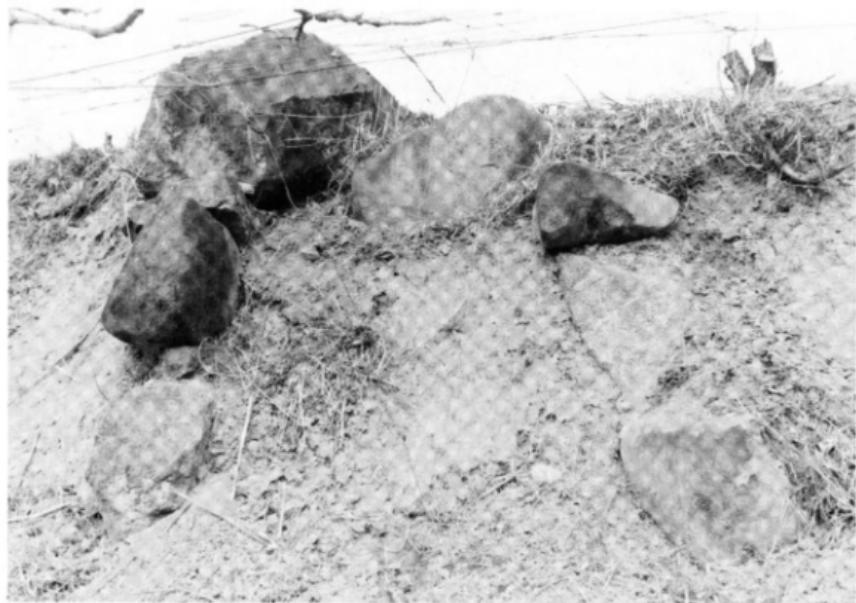
石室開口部



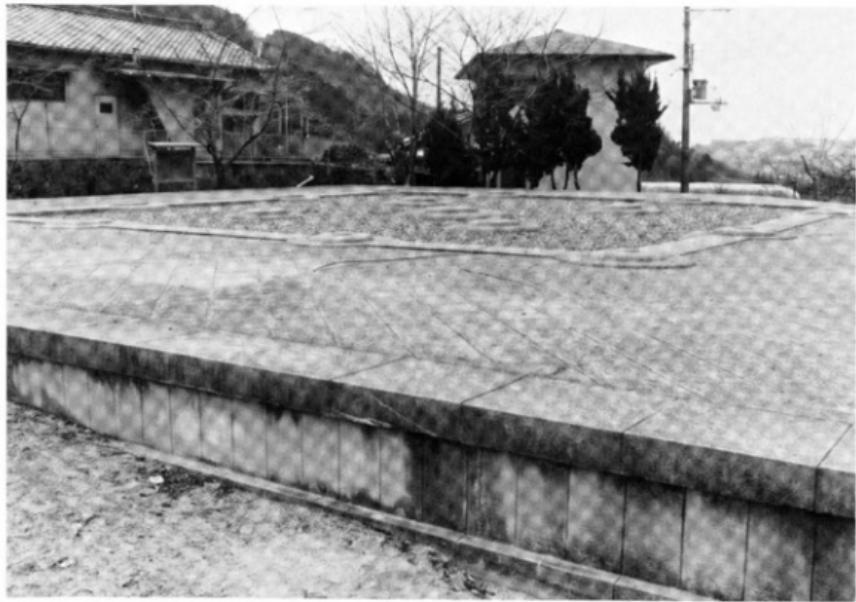
石室内

第12区古墳発見地点





12区-古墳



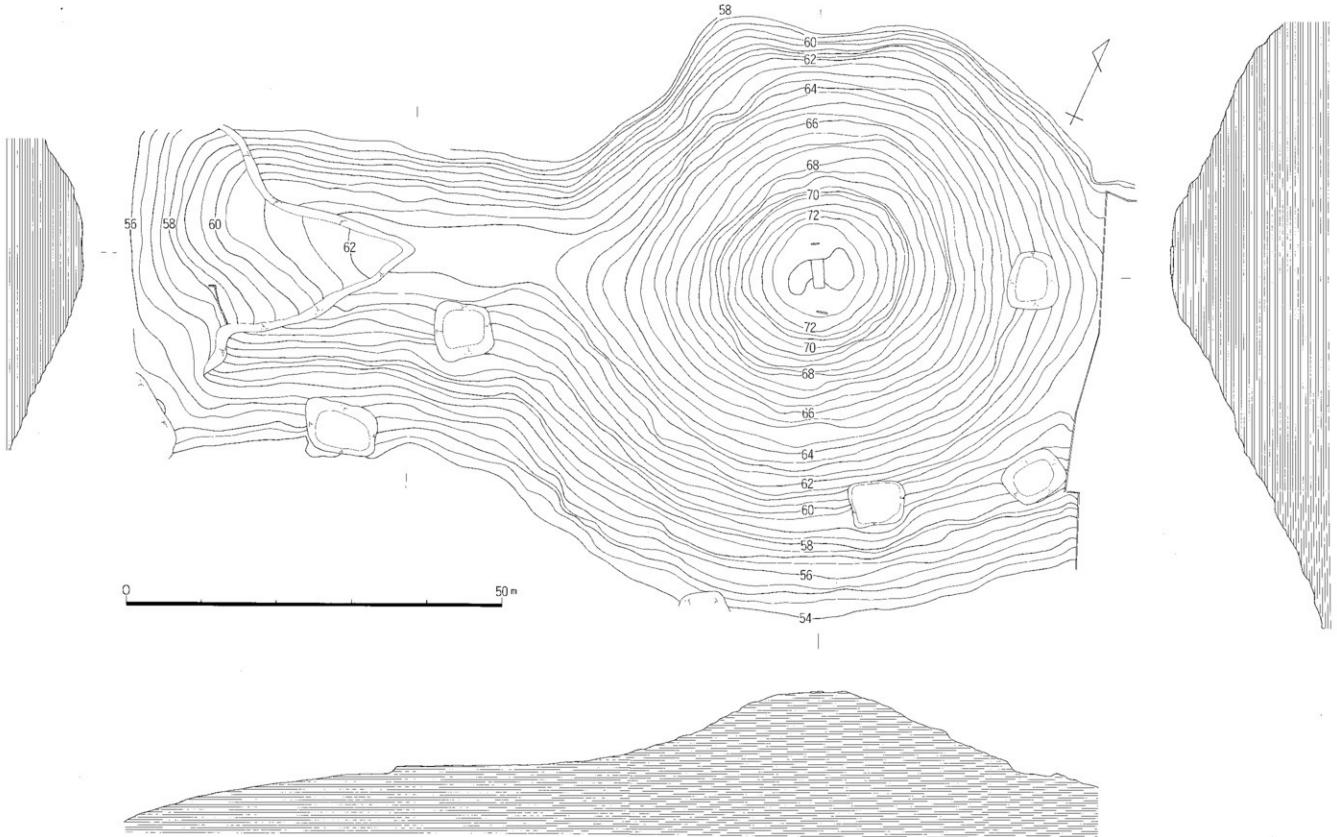
17区-国分寺塔跡



青谷遺跡



芝山





明神山からの遠景



墳丘測量風景



南から



北から



後円部北斜面



後円部南斜面

## 明神山系遺跡分布調査概報 I

編集・発行 柏原市教育委員会  
〒532 大阪府柏原市安富町 1 番43号  
電話 (0729) 72-1501 内716  
発行年月日 1985年3月  
印 刷 東洋紙業高速印刷株式会社

